秋と小説と苺と　～君に伝える～

白黒　朝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋と小説と苺と　～君に伝える～

【Ｎコード】
Ｎ５２５２Ｏ

【作者名】
白黒　朝夜

【あらすじ】
秋、〆切に追われる文芸部。
苺の香りが漂う部室には私と友香と２人の１年がいた。
すべては去年、始まったのかもしれない。
甘くてすっぱい恋愛ストーリー。

（前書き）

友香「何をしてるんですか？」

楓「苺を部室で育てようとがんばってるの。」

友香「無駄な努力をする前に手伝ってください。」

楓「冷たい！アイスより冷たい！」

足元を見ると一枚の紅葉が落ちていた。

「もう、秋か。」

私、赤坂楓（あかさかかえで）は苺を食べながら景色を眺めていた。

「先輩。苺は季節はずれです。」

隣で私の可愛い後輩、佐藤友香（さとうゆうか）が苺のパックを奪い上げた。

「ちょ！何すんの！私の命の元を返して！」

「秋らしい名前なのになんで苺が好きなんですか。」

友香は１６５ｃｍ。私は１５７ｃｍ。・・・手が届かない。

「名前は関係ないじゃん、ってかその苺高かったんだから返して！」

友香が上げていた手を下ろした。急いで苺を奪い返す。

「それより先輩、手伝ってください。〆切が近いんですよ。」

私たちは文芸部。部員は私と友香と1年2人。〆切は明日・・・

「友香。見てごらん、夕日が綺麗よ・・・」

「先輩。現実逃避しないで手伝ってください。それとこの部室からは夕日は見えません。」

「小鳥のさえずりが・・・」

「カラスです。」

「・・・」

「この小説、タイトルすら決まってないんですよ。」

「・・・」

「後、何ページか知ってますか？」

「友香。」

「はい、なんですか？」

「私は今まで黙ってたけど、実は2次元の世界から来たのよ。」
「そうですか。」
「・・・・・冷たい。」
「そうですか。」
「その大きな胸に優しさは入ってないの？」
「そうですか。」
「・・・・」

だんだんと暗くなってきた。

「あ、もう帰ろっか。」
1年に話しかける。
「でも、明日までに終わらせないと打ち消され・・・」
「いいのいいの。どうせ、私の考えたくだらない夢物語なんだから。」
「でも・・・」
「どうせ、去年みたいに誰も読んでくれないんだから。」
「・・・」

部室に鍵をかける。もう外は真っ暗だ。

「ばいばーい。」
1年に手を振る。
2人が小さく手を振り返すのが見えた。
「先輩、行きますよ。」
友香が服の端を引っ張った。
「はいはい。」

友香の家は何処にあるかは知らないけど、いつも同じ方角だ。
だから、いつも一緒に帰っている。

「くだらなくなんかないですよ。」
「え？何が？」
友香が真剣な顔で私を見た。
「今回の小説のことです。」
「ああ、1年に言ってたセリフか。」
「それに何人かちゃんと読んでますよ。」
去年、確かに3、4冊ぐらい売れた。

「でも、私なんかの夢物語なんてつまらないよー」
「そんなことないです！！」
友香が今まで聴いたこと無いような大声で叫んだ。

「つまらなくないです！私は去年の小説を読んで、感動して、書いた人に会いたくて、この文芸部に入ったんです！！先輩の大大大大ファンなんです！！」
「わ、分ったから落ち着いて！」
友香の息は荒かった。この子がこんなに感情を出したのは初めて見た。
「と、とにかく、今回の小説だって、楽しみなんです。」
友香の目が潤んでいた。

カラスが鳴いている。

「そういえば友香の家って何処？」
「神大利です。」
「神大利・・・って、真逆の方向じゃん！！」
「こっちからの方が近いんです。」
「いやいや、それは無いでしょ。」
「そうでもないです。」
「あ、もしかして、私を送ってくれてるんでしょ。」

「そ、そんなことあるわけないわけ○△×♪◎■・・・」
「あれ？そうなんだ。」
「・・・私、変ですか？」
「え？いや、変じゃないよ。」
「私・・・先輩のことがスキかもしれないです。」
「え？私も大好きだよ。」

街灯が点滅している。道には人影がなかった。

「先輩のスキはＬｉｋｅのスキですけど私のスキはＬｏｖｅのスキです。」
「友香。」
「はい。」
「送ってくれてありがとう。」

気がつけば家の前にいた。

「先輩！私の話聞いてました！？」
「じゃあね。また明日。」

ドアを開けて、中に入る。
親は今日はいない。
階段を上って、自分の部屋に入る。

鞄を開けると苺の香りがした。
「覚えてないのかな・・・」

＊＊＊＊＊＊＊去年＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
目の前には大量に詰まれた本。
通り過ぎる人。

「誰も買ってはくれないか。」
私、楓は諦めていた。
ふと、下をこっそり見ると紙袋がある。
あまりにも売れないから自分でこっそり3冊買ったのだ。

「この本下さい。」

上から声がした。
見上げると165cmぐらいの大きな女の子が立っていた。

「300円ですよね。はい。」
その子の手には100円玉が3枚あった。

「あ、ありがとう。」
その子は苺の模様の鞄を持っていた。
「苺、すきなの?」
「え?あ、はい。好きです。」
「そうなんだ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

もう、1年もたっている。
その後、わざと苺を持ってきている。
友香は気づいてるかな・・・いや、気づいてないのかも。
「あーあ。私から告白するつもりだったのになあ。」

END

（後書き）

初のＧＬ小説です。
あんまり自信は無いです・・・
ここまで読んでくださりありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5252o/

秋と小説と苺と　～君に伝える～

2010年10月26日16時23分発行